

あーすフェスタ 2019

あーすフェスタフォーラム ～多文化共生のこれまでと、未来へのトビラ～

2019年5月18日（土）14時～16時30分

於：あーすぷらざ2階プラザホール

来場者数：72名

ファシリテーター：小貫大輔（東海大学国際学部教授）

司会：朴 勇俊（あーすフェスタ 2019 企画委員、フォーラム部会）

司会： 本日は、あーすフェスタフォーラムにお越しいただき、誠にありがとうございます。フォーラムを始めるに当たり、何点か注意事項のご連絡です。まず写真・動画撮影など禁止となっておりますので、今後スタッフの方でのみ、撮影と動画を撮りたいと思います。入場の際に、撮影許可の方、どうしても写真がだめだという方はお聞きになったと思いますので、そちらを考慮に入れさせていただきたいと思います。あらかじめご了承ください。また、会場内飲食禁止となっておりますので、飲み物もだめです。ご理解・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

それでは只今より、「あーすフェスタフォーラム～多文化共生のこれまでと、未来へのトビラ～」を開催いたします。（拍手）

それではまず、主催者を代表して、金玄虎企画委員長に挨拶をいただきます。よろしくお願いいたします。

金玄虎： みなさん、こんにちは。

本日は第二十回目となるあーすフェスタのメインフォーラムにお越しいただき、誠にありがとうございます。私は企画委員長を務めます金玄虎と申します。よろしくお願いいたします。所属団体は総聯の参加団体である、在日本朝鮮青年同盟神奈川県本部の委員長をしております。

さて、日本は開国以来外国人が住みはじめ、第二次世界大戦を経て、多くの外国人が住むこととなりました。また、ベトナム戦争が終わると共に、難民や法律の改定によって、さらに多くの外国人が住み始めました。そして、バブル崩壊、様々な社会情勢の中で、日本の外国人の数は次第に増えていきました。

現在神奈川県には174の国と地域から21万2千人を超える外国籍の人々が住んでいます。神奈川県は1970年代から他県より先駆けて、「民際外交」「内なる国際化」「多文化共生社会の実現」を課題としながら外国人を住民として位置付ける課題に取り組んできました。

その中で、外国籍県民かながわ会議・NGO かながわ国際協力会議が設置され、日中韓市民交流フェスタを皮切りに、総聯・民団・華僑総会の3つの民族団体が主体となって、2,000年から毎年あーすフェスタを継続して行ってきました。この3つの民族団体が主体となって

行っているイベントは、唯一ここ神奈川県だけです。

第一回目のあーすフェスタからあるのがこのフォーラムです。フォーラム、そしてあーすフェスタは、多文化共生社会を目指す異なる国籍・文化を持つ人たちが集まり、意見を交わし、気付きを得ることで、お互いを理解する機会を作っています。あーすフェスタの原点は、まさにこのフォーラムと言えるでしょう。

この20年間、外国籍を持つ人の構成も大きく変わりました。私は所謂「朝鮮」籍ですが、20年前は日本における外国籍第一位は「朝鮮・韓国」籍でした。しかし今は中国籍の方が第一位となっております。更に毎年外国人の数は増えており、様々な文化を持つ人たちを理解し、多文化共生社会を作っていく事は、これからの社会において、必要不可欠な物だと言えるでしょう。

本日、記念すべき第20回目のフォーラムは、多文化共生社会を作っていく上で、この20年で何が変わり、何を変えられなかったのかについて考え、未来に向けてどのような変化が必要なのか。を、ゲストを招き、話し合っていきたいと思います。

今日参加される方が、あーすフェスタ20年目の姿と、多文化共生社会のこれからの姿を、見て・感じて頂けたら幸いです。

それでは「あーすフェスタフォーラム ～多文化共生のこれまでと、未来へのトビラ～」スタートです！（拍手）

司 会 :

ありがとうございます。遅ればせながら私の自己紹介を簡単にさせていただきます。

今回あーすフェスタフォーラムの担当を務める、朴勇俊と申します。在日コリアン3世で、福島県生まれ、神奈川県育ちです。本日は至らない部分も多々あるかと思いますが、参加された皆様が少しでも多文化共生社会を考えるきっかけになればと思っておりますので、短い時間ではありますが最後までお付き合いのほどよろしくお願いします。（拍手）

それでは、お待たせしました。本日、全般の司会を担当されるゲストを紹介いたします。昨年に引き続き今年も快く引き受けてくださいました、東海大学教養学部国際学科教

小 貫 : 授・小貫大輔先生です。よろしくお願いいたします。（拍手）

こんにちは。小貫大輔と言います。よろしくお願いいたします。

今ね、金さんという方が最初にご挨拶されて、それでさらっと、このあーすフェスタ全体の主催者は、総聯と、民団と、華僑総会がやってるんだ、そんなのなかなかないことだ、素晴らしいことだ、とおっしゃっていたんだけど、なんのことかわかりますか？総聯って何だか知ってる人。民団って何だか知ってる人。華僑って何だか知ってる人。だめじゃんそれじゃ。今日は、その三つの団体っていうのは、朝鮮半島から来た人たちと、中国と言われる本土とか台湾から来た人たちと、いろんなそういう民族の人たちが作ってる団体のことなんですよ。神奈川県は、本当に昔からいろんな国の人たちが来て暮らしてる町、県なので、すごくいろんな意味で歴史のある国際的な県なんです。そういう県で皆さん生きていることをどれぐらい実感しているか、ということと、それでもまた最近全然

雰囲気が変わってきているんですね。神奈川にはブラジルから来た人もたくさんいるし、スリランカから来た人もすごくたくさんいるし、ネパールから来た人、カンボジア、タイ、いろんなところから新しく人がたくさん来ていてまた雰囲気が変わってきているんですね。その新しい神奈川の雰囲気をみなさんがどう感じているのか、そのことをちょっと最初に自己紹介をしながら、周りにいる人とアイスブレイクみたいな感じで、今どんなことを考えているのか、周りの人とちらっとお話しする時間を設けたいと思います。お付き合いいただけますでしょうか。（拍手）

最初やろうと思っていた、実は遊び心もあって、いろんな文化の挨拶の仕方を体験していただきたいと思うんですね。ここに紹介した、僕ハワイに住んでたんですけど、3年間。（写真）ハワイの挨拶、かなり濃厚ですよ。おでこをくっつけて、鼻をくっつけて、スーって相手の命のおいをかぐんですね。これできるかな？もっと初歩的なやつからいきましょね。

ちなみに僕は東海大学の国際学科で教えています。ブラジルに本当に20年ばかり行ったり来たりして、向こうに12年間暮らしていたので、ブラジルの挨拶ぐらいまでは、今日はたどり着きたいなと思っています。一番初歩的なやつ、いましょ。みなさん、日本の挨拶、お辞儀をやってみましょか。いい？ちょっと立ってみてください。（一同立ち上がる）

ちなみにこれ、ブラジルとかドイツとかヨーロッパでしょっちゅう教えるんですけど、お辞儀やったことない人がやると難しいんですね。皆さんはきちんと多分できると思うので試験します。皆さん、こんにちは、っていうので、お辞儀してみてください。

「皆さんこんにちは」…あれ、違う。僕が先生なので、正しいお辞儀っていうのは僕より長く、ね。もう一回。

「こんにちは」…気持ちいいね。お辞儀って、何やってると思いますか？毎日、一日に何回も。金さん見てもこんにちは、って何回も。こうして。一日中やっているお辞儀を通じて、われわれは、日本人は、どんな体験をしていると思いますか？後でちょっと聞くので考えておいてください。いいですか。

そのお辞儀とすごく違う挨拶を今から紹介します。お辞儀のすごい面白いところは、いっぺんにやって終わっちゃったんですね。一回で全部できる、素晴らしい便利な挨拶だと思うんですけど、世界中で一番多くの方がやる挨拶ってなんだと思いますか？握手ね。握手は一人ひとり全員とやらないといけない。その違いを体験してもらいたい。

傍にいる人と、握手であいさつをして、自己紹介をしてください。自己紹介したあとにちょっと話をしてもらいたいんですね。神奈川県先進的なところはどこだろう、国際的なところを感じますか、体験しますかって自己紹介の中で聞いてみてください。その前に握手。ペアを組んで握手してみてください。（実践）

ちょっとねやっぱり、すぐ見て思うのはへたくそ。失礼な言い方なんですけど、やっぱり握手は本場があって、ヨーロッパでいう北の方の挨拶なんですね、ドイツとか。イギリス人が200年かけて世界に広め続けた。その後アメリカ人が一生懸命広め続けた。300年か

けて世界中の人が習ってきた挨拶。イギリス・ドイツ本場の握手の仕方を今日覚えて帰ってください。握手で一番大切なのは向かい合ってみてください、正面から。ななめは失礼。まっすぐ、そしてイギリスでそういう講座やっているらしいんだけど、相手の目の色を覚えていられるぐらい、目をしっかり。そして自分を譲らない。さっきから何人かそうじゃない握手をしてたんだけど、まっすぐした自分と、まっすぐした自分。手を握り合って、一瞬で出会います。握る時に、若干痛いぐらい。でも痛いので、握手をして、離す。ちょっとやってみて。(実践)

もう一回やり直しね。あの、握手って、あまりにも世界に広まったから、国によって国によっていろんな握手が生まれてるんですよ。アフリカはやわらかい握手、インドはいつ終わるかわからない、そのまま会話が始まっちゃうのね。日本人の特徴的な握手はこう。これは握手じゃなくてお辞儀なので。かっこよく。(握手タイム)

よろしい。では、その今であった方と、神奈川県に住んでいてどうですか、あなたのお名前はどこからですか、神奈川に住んでいてさすが国際的だな、神奈川だなと思う体験があれば話してみてください。(会話)

どうですか、話できましたか？ちょっとですね、握手も毎日何回もやるわけですよ。全員とね。握手で会う人と人の出会いを毎日練習している人たちが他方いて、日本では毎日毎日お辞儀をする練習をしているんですよ、どういう違いが自分の中にしみ込んでくるのか、何がそもそも伝わってくるのかを考えてみてください。後でまた聞きますね、で、今の握手。

今度はブラジルの方いってもいいですか？ブラジル結構、アドバンストコースですよ。ブラジルのペアを組む前に、今の人とサヨナラをしましょう、握手してまたあとでね、と。(挨拶)

今度違う人と組んでください。ブラジルにはいくつかの挨拶がいくつかあるんですが、面白い挨拶を教えます。できたら女性同士か男女、男性同士じゃない人と組んでみてください。(ペア組む)

えっとですね、先に言っちゃうね。ブラジルではほっぺたにチューをします。その違いを感じるために、まずお辞儀してみてください。自分と相手とのつま先の距離はどんな感じかな？その距離おぼえといてね。

目をしっかり見て握手してみてください。つま先の距離を見てみてください。変わりました？ちょっと距離が違うよね、挨拶がもたらす距離が違う。ブラジルはその握手の距離よりも近い。ちょっと今握手してみてください。相手の目を見たまま、お互い半歩ずつ近づいてみてください。近い。この距離がブラジル人と会話するときによくある距離。あまりに近いからハウスパーティをやっていると、日本人とドイツ人が壁に押しやられていく傾向がある。その近さで挨拶するんですが、ブラジルの挨拶は目を見つめあったて近づいたですぐに懐に入る。その懐に入るのがほっぺたにキスをする。形式的にしているの、唇は当たらない。

音だけ、ちょっと練習ね。(先生お手本) 3, 4でほっぺたをくっつけて、このとき嫌がる人がね、嫌がってんなって伝わって苦しい思いをするので、心から相手に自分を捧げ

て、ほっぺたをくっつけて、どんなにひげ面なひとでも我慢して、チュッという音を易しくしてみてください。腕を組んでいるといけない。相手の腕を持って。（笑い声、実践）

誰かボランティア。あのちょっと来ていただいていいですか。皆さん見てみてくださいね。モデルを示しますね。あんまり急いでいくとガーンってぶつかるので、どこか押さえて。近づいて。もう一回やってみてください。上手に。

それで、ちなみに右が先、必ず右、そうでないとぶつかるので。今日僕リオデジャネイロの人と歩いていて、リオデジャネイロの人は2回、サンパウロは1回、フランスの街なんかいくと4回の町もあります。もう一回やってみましょう。（体験）

はい、自己紹介をして、あなた最近の神奈川県どう思います？伝統とかじゃなくて、今の神奈川県の国際化の状況、何か体験していることがありますか？って。聞いてみてください。（各自会話、3分ほど）

どうもありがとうございました。どうですか？この、お辞儀の距離と、握手の距離と、ちょっと違う距離なんですよ。それぞれをそれぞれの文化の人が毎日毎日練習して、ある影響を受けているんですよ。それぞれのいいところ、その国の自慢な美德みたいなのが表れていると思うんですけど、日本の文化って我々に教える美德、文化ってなんだろう、握手ってなんだろう、ほっぺたにキスをする人は何を大切にしている人なんだろう、ちょっと考えてもらいたいと思うんですが、ひとまず今の方とはサヨナラのチューをして、3回。あまり上手じゃないけど。では席についてください。

どうですか。3つの挨拶、どれが一番しっくりした、好きですか？それぞれの持つるメッセージ考えてみましたか？テーブルの人と話をしてみてください。（会話）

あのですね、やっぱり日本人にとって、ほっぺたにキスしろって言われて、えっ、そんなのがあるんだって思うように、実はお辞儀の方が世界的にみると珍しい挨拶ですよ。お辞儀を挨拶としてするのはたとえば朝鮮半島もお辞儀は挨拶だし、中国でもお辞儀がある面があるけど、日本人みたいに、こんなに友達とお辞儀をするところは多分珍しい。目上の人にはしっかりやるけど、みたいな。日本のお辞儀は西洋の社会ではとっても珍しい。何やってるのあの人たち、というところがあるわけね。人と出会おうと思ったら、突然ぱっと止まって相手がいなくなるわけですよ、この人どんな人なんだろうと思ってこんにちわって言ったら、目の前から消えてなくなるわけですよ。この不思議さをブラジルの人がおちよくったコマーシャルがあるので紹介します。日本でワールドカップやった時のペプシのコマーシャル。

（動画再生、笑い声）

あのね、ブラジルってなまじっか日系人がいっぱい住んでいるところだから、ブラジルの人は日系人と普段触れるじゃないですか、やっぱり不思議に思うんですよ、いじられるんですよ、日系人としてブラジルで育つとまわりからいつもいじられちゃう。ちょっとかわいそうなところもあるけれど、でも反面親しみも感じていて、僕もブラジルが長かったんですけどね、ブラジルで暮らしていて、ほっぺたに毎日挨拶してもらっていると、ついでにぎゅっと抱きしめられるわけじゃないですか、一日中何回も廻ってくるわけじゃな

参加者 : いですか、日本に帰ってくるとさびしいですよ本当に。誰にも抱っこしてもらえないからね、お父さんもお母さんも抱っこしてくれないしね、まあもうでかいんだから当たり前だろってね。あのこのさみしさ結構耐えられないことがあるんですけど。

小 貫 : 今どんな話が出ましたか？どこか誰か1つぐらい聞けないですか？この辺で。

目を合わせるって大事だなと思ったんですよ。日本のお辞儀って目が合わないじゃないですか。だからもし、日本にルーツがない人がお辞儀するってなったら、そのタイミングとか、目をどう合わせるのかって難しいなと思いました。

実は目を合わせるのは握手にすごく強調されている部分で、ほっぺたにキスをする人たちもいきなり懐に入っちゃうので、目が合わなくてそのまま終わっちゃうところがあるんですよ。僕はこの3つともやるとね、それぞれのいいところを全部人との関係の中で体験できるからいいと思うので一回やってみてください。

こんにちは、よろしくお願いします、なかよくしましょうね、3つやって、サヨナラするときは楽しかったですね、また会いましょう。3つ必ずやるようにしたらどうかと思っているのですが、日本の挨拶の一番重大なことは、この素晴らしい挨拶をまじめにやってないこと。

ブラジル人は毎日ね、一生懸命キスしてくれますよ。本当に昨日会ったばかりなのにしばらくあってないみたいにやってくれるんですよ。イギリスに行ってもドイツに行ってもしっかり握手しないとみっともない。日本の人が本当にいいお辞儀をしているか。大学で仕事しているとこんにちはって、目を合わさないためにお辞儀したり、面倒くさいから頭下げるところがあったりして、駄目じゃないかなと思うんですよ。

僕の仲のいいイギリス人の先生が、コンビニでいらっしゃいませっていう人にしっかり私は挨拶をしますっていうんですよ、ありがとうございます。そうするとコンビニの人がしっかり挨拶してくれる、とかって言っていました。

以上、自己紹介を兼ねて、今日の主旨について考える機会を持ってみました。では、次のセッションに入りたいと思います。

今日は、先ほども出た様に、古い、昔からの神奈川県国際的な雰囲気を作ってきた人たちと、今の新しい神奈川で起きていることを体験している人に、三人にお話を聞きながら次のセッションに入っていきます。

最初にご紹介したいのは堤さんです。堤さんは、さっき言った華僑総会という中国系の人たちについて話してくださいます。堤さん、どうぞ宜しくお願いします。

もう一人は、アイシャさんです。去年、この会場で知り合いました。パキスタンのお父さんと、ペルーのお母さんの間に日本で生まれて育ったアイシャです。（拍手）

そして、斐安さんです。（拍手）見て、想像がつくところもあるかと思いますが、後程ご自身で詳しく話して頂きます。宜しくお願いします。

堤 : 最初に今日お話し準備をしながら、堤さんがメッセージを書いてくださったのですが、すっごく面白いなと思ったのです、日本で中華学校に通いながら、家庭でも中国語が日本語と一緒に存在していた環境で育った中での体験から始まるのかなと思います。それでは、宜しくお願いします。(拍手)

あらためまして、皆さん、こんにちは。プログラムには白黒の判りにくい写真でしたので、ちょっとカラーにしてみました。どこで撮ったかはご想像にお任せします。拙い日本語ですが、しばらくお付き合いいただきたいと思います。

アイデンティティーについて、これから話してみたいと思いますが、一応古い法律で行くと日本で生まれる際に、うち両親が中国人なので、中国籍で生まれることになりました。がしかし、ご覧のとおり見るからにこのような状態なんですが、政府から中国人として定義されたので、中国人として生きてきました。中国人学校が中学校であったので、(マイク整備) 中学まで中国人学校で主に中国人社会の中で暮らしてまいりまして、今ではそんな色ないほど喋っていますが、高校は言った当時は同級生に「さようございますか」「本日はよろしくお願ひ致します」という日本語で生活をしていて、一体お前何人だよ、と話になっていたんですが、そのころから日本の方と同じように高校受験、大学受験して、自分の能力を示して進んできたわけでありまして、16の時にですね、当時外国人証明登録書を持たされるわけですよ、指紋を登録してね。そうすると、「自分は普通じゃないのかな、周りと違うのかな」とアイデンティティーに疑問を感じて。わざわざ高校大学行ったのも、どこの学校行ったの? いや日本の学校だよ、いや学校は日本のものですよ、当たり前でしょ、ってなるけど、僕らからするとバックグラウンドが中国社会だと、わざわざ日本のってつけないと、うまく説明できないもどかしさがありました。昔でいうところの10代・20代・アラハタ「アラウンド二十歳」ではそういう感覚はありました。逆に高校、大学というところでいろいろ指摘を頂いたので、ご忠告を賜りましたので、うまく軌道修正して何とかまっとうな人生を歩んでおります。

今のさまざまな生き方、いわゆる今、中国社会はどうか? はっきりいって日本社会と変わらないと思ってます。僕は中国社会3世代目ですので、当然納税もしてますし、年金も払ってるので何も変わらないですし、あとは親戚の中では介護の問題とか。孤独死は聞かないですが…。仕事は会計事務所なのでお客様からご相談いただくのは後継ぎがないので店をどうやって閉めるのかなど、悲しい問題を見聞きすることはありますが、そういうところから考えると、国籍とか文化とかバックグラウンド関係なく、日本で住むことによっては、そんなに肩ひじ張らなくても、お互いに意識しなくても、日本のルールの中で生きていくうえで困らないかなと思っております。

最後になりますが、これまでの20年とこれからの20年ということで、先ほど話した通りあーすフェスタ自体初めての体験で、先ほど先生からご紹介いただいた華僑総会からご相談でこんなこと言ってみない、という話になり、初回からいきなりこんなに大役を任されるなんて、思っていたら来てませんよと言いたくなっちゃうんですけど…なんか愚痴っぽくなっちゃいましたが笑、これまでの20年からしてみれば、申し訳ないですけど、あー

すフェスタが20年続いたこともそうですし、やってきたことというのは正直感じられませんでした。だからこそ、この先どのくらい参加させていただけるかわかりませんが、やっぱりやる以上は少しでも変えていきたいと思えますし、変えなくちゃいけないなど。

生き方の問題で、僕ら3世代目なのでオールドカマーということになるのかもしれませんが、立ち位置関係なく、同じベクトルに皆さんの思考を持っていかなきゃいけないなど。同じ日本に住まう上で、外国人とか日本人とか長く住んでようが短く住んでようが、みんな同じ方向を向いて歩いていけたらなど、思っております。

途中話が二転三転していたかもしれませんが、終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。（拍手）

小 貫 : どうもありがとうございました。

何か、ちょっとスルーした感じがあるんだけど、中学校の時まで学校で日本語を学んでいたから、敬語的な何々を食べますとか、食べるとかじゃなくて、そういう日本語を学んでいたのに、中華の高校に入ったら、やけにお前敬語で話してるじゃんと言われちゃったという話でしたね。

その堤さんの人生の中で、何時も自分というものと普通という言葉が、何か引っかかった。普通の、という言葉がつついでてきちゃう、じゃー自分は何なんだとずっと考えてきた人生だったというお話だったと思うんです。

そういう体験を昔から日本の中でしてきた人たちが今オールドカマーとして、日本の社会に国際的なものをもたらしてきたことがあるかと思うんです。そういう人たちを経て、今新しく、違うタイプの人たちがたくさん沢山増えてきて育ててきて、今アイシャさんたちにバトンタッチしようと思うのですが。

どうも、堤さんありがとうございました。まだ続きがあるので、待っていてください。

では、アイシャさんに次の話を、で、何か変わったものという話ですよ。昔の人たちは苦勞した、前の世代の人たち、中国から来た人たち、朝鮮半島から来た人たちは本当に大変な思いをして日本の社会の中の地位、位置、自分というものを探してきた中で、じゃあ今来た人たちはどうなの、何か変わったの、日本社会は変わったな—という話をぜひ聞きたいなと思えます。では、アイシャさん宜しくお願いします。

アイシャ : 私は、シェイク藤原アイシャです。最初に、私のルーツについて話したいと思えます。私の母親がペルー人で、父親はパキスタン人なんですけど、私は日本で生まれて、日本で育ちました。

両親はそれぞれ違う理由で、お母さんは出稼ぎで日本に来て、父は車のビジネスを始めたいという理由で日本に渡って来て、お互いが日本で知り合って私が生まれました。私は、日本人と同じように、日本の幼稚園、小学校、中学校、高校、大学と一緒にいろいろと学んでいるんですけど、幼稚園までは、全然自分がみんなとはちょっと違うなと思ってはいたのですが、小学校ぐらいになって、あれなんか「あなたなんか違ってない」と言われ始めて、何か外人、外人と言われて、え、自分てそんなにみんなと違うのかなって思

うようになって、なんか最初は言葉だけだったですよその「外人」という、だんだん小学校3～4年生ぐらいになっていじめが始まって、ま、その時は気づかなかったですけど「いじめ」って、なんかすごい追いかけられたり、なんか押されてズボンが切れちゃって、血が出たりして、それで家に帰って、全然親に話すことが出来なくて、誰にも相談できないまま高校ぐらいまで行ってしまいました。

高校の時に、オルタボイスキャンプというキャンプがあるんですけど、そのキャンプは神奈川に住む外国籍の中学生高校生が、神奈川に住んでいてつらい事や悲しいことがあっても共有しあえるような場なんですけど、そこに参加した時に初めてこの自分の体験談を話すことが出来て、今まで一人だったと思ったんですけど、同じような体験をしてきた人の話を聞いて、自分が一人じゃないということに気づいて、とてもうれしい気持ちになりました。

2番に移ります。

今までは、いじめられてしょうがないとか、どうしようもない、自分には何も出来ないと思っていたんですけど、その仲間に出会えたことによって、何かしたいなと思うようになって、外国人の差別をなくすために、何かしたいなと思って、高校生の時に、その例えばオルタボイスのリーダーをやってみたり、こういうあーすフェスタなどに参加してみたりして、いろんな人に出会って、自分からもスピーチとかして、自分の思っていることなどいろいろと発信してきました。

今は大学生で、大学では多文化ユースという大学生の団体で今活動しています。日本には、まだ結構いろいろな差別が残っていて、たぶんビックリしちゃうかも知れなんでしょうけど、この間日払いのアルバイトの応募をしてみたら、なんか外国籍だから断られてしまって、凄い意味が解らないと思って、なんでダメなんですかと聞いてみても、ちゃんとした答えをもらうことが出来なくて、まだこんなの、令和なのにまだこんなんだと思ったりして、やっぱり外国人にとって、今の若い人たちからしてみれば、ハーフは良いなみたいに言うと思うんですけど、外国人だからアパート借りる時に、あーパキスタン人だ、ペルー人だ、うるさいからダメみたいな感じでアパートを借りることが結構難しいこととか、私の夢は、JICAの青年海外協力隊に行くことだったんですけど、高校生の時にインタビューにしに行くと、その時初めて外国籍の方は参加出来ないことを知って、凄いショックを受けたんですよ。その時は、なんでダメなのか質問することが出来なくて、去年電話して聞いてみたところ、なんか80年前に始まったものだから、今更変えるわけには行かないみたいなことを言われて、あ、じゃあ変わろうともしていないと思って、もう、良いや、でも凄いショックで、なんか素晴らしい団体なのに、難しいですね。

だから、とりあえず、今私たちに出来ることは、お互いを知ること、そして理解することだと思っていて、私が住む、神奈川県の大和市では外国人と日本人の交流会はあるんですけど、やっぱり興味がある人しか参加しないので、もっと街全体の人が興味を持たなきゃダメだなと思って、日本人が外国人に興味を持つ事も大事だと思うんですけど、やっぱり外国人の方も自分から発信していかなきゃダメだなって凄い思います。以上です。

小 貫 : どうもありがとうございました。

仕事を選ぶ権利、自由というのは、凄く基本的な人権の中にあるわけですよね。その中で、法律によって外国籍の人が成れない規定がある職業は、確かに日本にまだあるんですよ。確か消防士とか、自衛隊員だとかいくつかあるんだけど、警察官、その中で JICA のボランティアは法律に規定されて外国籍の人が制限されているのかなと今、凄く思ったんですよ。もしそうじゃないとしたら、変えないといけないよね。やっぱりしっかりと変えて行かないといけないことってあると思うんですよ、それをね、やっぱり当事者にすれば、体験しなければ気づかないけど、アイシャだけじゃ変えられないんだよねやっぱりね、日本の社会全体が変えようと思わないと変えられない。でも、気づかせてくれるのは彼女なので、素晴らしいお話を聞いたなって思います。拍手だなー。(拍手)

そんな中で、ある意味日本の社会いろいろな問題があることに気づいて、変えてきた歴史のある、やっぱり在日の朝鮮の人たちの歴史って言うのがですね、そんな話を含めて次は斐さんのお話を伺いたいと思います。

斐 安 : みなさんこんにちは。かながわ外国人住まいサポートセンターで活動している斐と申します。

アイシャさん、御家を借りるのが大変だったら、是非うちに来てください。皆さんも、生活の心配などありましたら、私たちの団体に来て頂けると 9 言語、日本語と合わせて 10 言語で対応しております。任してください。大丈夫です。

私の方は、先ほど金玄虎さんが、企画委員長が私の話そうと思っていたことは、前段のところは話してしまいました。

まずこれを考えてみたい、ほしいんです。(スライドのタイトルは「日本人とは?」)日本人って、皆さんが思っている日本人ばかりじゃないですよね。中国の帰国者の方々、日本国籍だけど全然日本人扱いされないですよね。あと、ブラジルから戻って来られた日本の国籍の方々も、結構大変な人が多いですよね。え、全然大変じゃない。そんないっちゃだめか。

そういうふうに見ると、いったい誰が日本人なんだろう。じゃ、外国人でだれなんだろう。私は、日本で生まれた二世なんですけど。

堤さんもね、日本人よりもさっき日本人らしいよねとか、言ってみたりしますよね。それを追及する意味ってどこにあるんだろうと、私は思うんです。

外国人問題というと、外国人が騒ぎを起こす、犯罪を犯す、ルールを守らない、うるさい、ゴミをちゃんと出さないとかそういうことが問題になっていると思うけど、外国人問題とはそういう問題ではなくって、外国人が当たり前の住民として生きて行くのに、権利が、権利を享受できないというのが外国人問題なんですよ。

これは誰の問題かというと、外国人自身の問題ではなくて、日本人の日本社会の日本の国の問題なんですね。

その外国人問題を外国人に押し付けられていて、あなた達がちゃんとしなから問題と
言われちゃうというのは、これに当たり前に一緒に暮らしている住民として一体どうなん
だろうと、私は常に考えているんです。

これは、神奈川県最新のデータですけども、もう 21 万人になります。今日の朝、副知
事が言っていましたけど 21 万人、横浜市でも 10 万人を超したとことになっています。
と、いうことは 53 人に一人とかいう数ではなく、もう 40 何人に一人という状態になっ
ていて、国籍だけでみても外国人はたくさんいる訳ですから、もう人口のパーセンテージ
に言うとももの凄く増えているし、中区、南区、鶴見区のあたりだとか、川崎市だとか、そ
ういったところだとももの凄く外国人のパーセンテージが高くなる訳ですね。
じゃ、そういうところで多文化が認められているのかと言ったら、ちょっと皆さん日本人
の立場と、私たち外国人のマイノリティーの立場からすると見えてくるものが全く違うと
思うんですね。

アイシャさんがおっしゃったみたいに、話したように家が借りられないとか、電話でバ
イト申し込んだら断われたとか、そんなことは日本人であって、日本の名前を持っていれ
ばありえないことだけれど、それは私たちの身の上には常に起こっていることです。私た
ちに世代、私は 61 ですけど私の時代は日本企業には入れませんでした。それは公務員に成
れるなんてとんでもない話ですし、普通の企業でさえも、朝鮮、韓国と言えば絶対アウ
ト、だからほとんどの人たちはパチンコ屋になったりとか、金貸しになったり、後は焼肉
屋とかそんなもんです。中国人、中華街は違うけど、決まった職業に殆ど就いている、そ
れが外国人なんです。

じゃ、外国人がなんで日本に居るのかちょっと考えてみてください。

この外国人が日本に住むようになった時代、開港から始まりますけど、開港の時も欧米
の人たちが香港立ち寄って、募集をかけて中国人を連れてくる訳です。要するに、自分た
ちの下働きです。

その後、戦前ですね。朝鮮半島からたくさんの人たちを募集とか、強制連行とか、そう
いう形で連れてくるわけです。その後長く、その間に戦争が終わって、研修生、実習生と
いうのはごく最近の話みたいに言われていますけど、もう戦後から直ぐ、研修生、実習
生というのは日本の素晴らしい技術を学んで本国で生かすために研修生、実習生を連れて
きているわけですね、内実はわかりません。

だけど、そういう長い時代を経て、その後、ベトナム戦争が終わり、出管法が変わり、
出入国管理法が変わり、そしてその後には私が大学を卒業したのは 1980 年ですけど、その
あたりになると日本の風景もどんどん変わっていくわけです。

街には外国の料理屋さんが出来たりとか、新宿の歌舞伎町なんかにいるとアジアの女性
たちがだーっと立っていたりとか、もうすごく日本の風景が変わってきていて、いろん
な国からいろんな人たちが入ってくるようになってくる。で、90 年代になってブラジル人
たちが日本に入ってきて、いろいろと生活の中でトラブルが起こる様になって、総務省が
つなぐ多文化共生などという素晴らしい言葉を生み出して、私はこの言葉があまり好きでは

ないんですけど、だから共に生きる世界を目指してということで、いつも話をさせてもらっているんですけども、その時も理由はなに、日系人に限り、日系人です何よりも日本人と同じ血を引いているかからよく言うことを聞いてよく働くだらう、ま、働きました、本当に良く働きましたけども、よく言うことは聞きませんでした。自己主張はちゃんとします、あの自己主張するのは悪いとよく日本では言われますけども、非常に自己主張もして、自分たちの生活パターンを守っていかうとする。することによりトラブルが続出する。そういうあたりから、神奈川県でも98年に、川崎は96年に外国人会議を設置して、神奈川県は外国人会議を98年に設置して、そして多文化共生の事業を推進してくるわけですけども、果たして20年が経った今、どうなんでしょうか。

じゃ、私はどこから来たか。私は朝鮮半島から。どこから来ましたか、今日もいろんな人に聞いてたんですけども、父親が日本に勉強しに来ました。でも、戦前だったので、留学とは、本当は進学なんだけど、父は進学という言い方はしませんでした。朝鮮半島で旧制中学を卒業して、日本に進学に来たんですけども、留学って言い方をずっとしていました。なぜって、プライドがあるんですね。日本に国権を奪われて、国が世界の地図から無くなってしまっても、自分の国から日本に勉強しにきた、留学してきたというプライドを持って生きてきたわけです。

では、ほとんどの在日コリアンと言われる人たちはそういう、いろんな事情で朝鮮半島から渡ってきた人たちです。1945年8月現在で220万人の朝鮮人が日本に残っていた。その、ほとんど人が帰国した、残りが私たちです。あの、こっち側で生まれたり、今日は極端に多くのコリアンの人たちがいますけども、ほんとはその人たちの子孫ということですよ。

ここで問題は何なのかというと、在日は何時も被害者意識ばかりで、あれも奪われたこれも奪われた、あれも出来ない、これも出来ないということを人に責任転換してきたとよく言われます。だけど就職できない、家も借りられない、本名も名のれないというような世の中の中で、私たちがどんなに声を張り上げても、実現できないことが、本当に就職できなかったです。朝鮮学校から日本の大学に入ることが出来なかったんです。だから、声を荒げて私たちは自分たちの権利を主張しようとするんだけども、ま、方法が正しかったかどうか解らないけども、私たちの主張は受け入れられることが出来なかったけども、ニューカマーと言われる人たちが入ってくることによって、ま、曲がりなりにも多文化共生という言葉が生まれ、そして共に生きようということが進められてきたのが神奈川県だと思うんです。

日本で外国人の権利が守られているかどうかということを見ていただければと思います。生活保護は、受給はできますが、準用です。一回受給が拒否された時は、異議申し立てができない。家を借りることも非常に難しい。そして、義務教育は義務化されていないんです。学校に行っても行かなくても、来るなら入れてやるよ、それが外国人なんです。

こういう流れの中で、あーすフェスタに行き着くわけですが、あーすフェスタの一番の目標、目的は何かというと、先ほど小貫先生からも、企画委員長からも話があった民族団体3団体が神奈川県で一緒になって、神奈川の多文化共生を作り上げて行こうという意気込みから始まったものです。

では、なぜこの3団体と県なのかというと、やはり長い間神奈川県に住み続け、そして日本以外の文化を守りながら生きてきた人たち、その人たちが新しく入ってきた人たちのモデルとなって、そして共に生きる、手の差し伸べ、一緒に生きて行こうよということを実現したいというところから、あーすフェスタは生まれてきました。

外国人会議やNGO会議を作ったり、神奈川もかなり頑張ってきました。

ちょっとこれは見ていただきたい（過去の活動の写真を投影）、こんないろいろと楽しいことをやっていました。歌や踊りや、食べ物だけではなく、ちゃんとフォーラムもして、多文化共生の意味ってどんなことだろうかと、毎回毎回みんなで持ち合って、考えて、持ち帰って、それぞれのところでこれでまた多文化共生を実現するために頑張ろうということもしてきました。

結局、私が言いたいのがなにかというと、私たちの父や母が祖父母の世代の人たちが日本に来たとき、労働力として日本に持ってこられました。そのとき来た人たち、オールドカマーにとっては、私たちの問題とニューカマーの人たち問題は違う問題だと、かなり長い期間言い続けていました。でも、私はボランティア通訳やいろいろなところで出会う人たちとお話をする中で、私たちの両親の時代と、新しく入ってきた韓国人だとか中国人、そのほかいろいろな国の、ブラジル人とかペルー人とかの話の聞いて行くと、全く同じ問題だということに気が付いた。やはり、日本は自分たちに労働力が必要な時にしか外国人を日本に入れようとはしないんです。大方の人ですよ、留学で来るとか結婚で来る人もいますし、ビジネスで来る人もいますけども、法を変えてまで外国人を大量に入れるというときは、常に労働力。今年みんな大騒ぎしてますよね、外国人が2年間で3年間で40万人増えるとか言っていますが、これはどうですか、労働力ですよ。労働力なんですよ、労働者ではなく、労働力なんです。だから、保障しないんです。

それが、日本の外国人というものを生み出してしまった一つの結果で、いつまでも住民として認めていかないというところが、これが日本の外国人政策の一つの結果です。移民政策はありません。だから、いつまでも住民として認められない、権利もなくて良いという状況に置かれてしまいます。これを私たちは今日のフォーラムの中で、みんなでもっと考えていきたいなと思います。

平等ということを役所にいくと、よくこういうことをされます。同じにやっています。差別していません。これで、平等になるでしょうか。（スライドの絵を示し）これで、どうでしょうか。ここに完璧があると思わないで、これを目指すということが多文化共生を実践して行くことじゃないかなと、私は常に思います。私の話は以上でございます。どうもありがとうございます。

小 貫 : どうもありがとうございました。ここで休憩をとります。3分ぐらいで戻っていただき、テーブルごとにお話を続けてもらいたいですよ。

(休憩)

小 貫 : 今裴さんからお話があった中で、ちょっと聞いておきたかったなーということがあるんですけど。やっぱり、裴さんたちの昔っから神奈川にあった外国籍の人たちの運動みたいなのがあって、そういう力があるから神奈川は全国に先駆けて、ちなみに外国人は選挙できないんですよ日本では、投票も出来ないし、議員にもなれない。そんな中で、神奈川だけは最初から、外国人の人たちの意見を聞く、外国人会議というものが作られて、凄い先進的な県なんです。人権意識の強い県だった、ところが、なんかそれが危ういのか、どうなっているんですか、そう言うことって。昔勝ち取ってきたことみたいなこと。

裴 安 : 私が、外国人会議のメンバーになったのが98年です。その時は、神奈川はとっても良いセンスをしていて、NGO 金沢国際協力会議、今日は一期のメンバーの横田さんがいらっしゃってますけども、丸谷さんもいらっしゃっている、そういう外国人会議と NGO 会議を一緒に発足して、その会議が交流しながら、そして神奈川県に向けて提言をして行く、素晴らしい会議でした。

その2年前には川崎の会議が日本で初めて外国人会議が設置されて、条例で設置されたので、非常に強い、提言ができる強いものでした。2年後に神奈川は要綱設置と言って、条例ほど強くはないのですが、でも県知事に直接提言すると書いてあるんですけども、それが今休止になっている。これだけでも神奈川県が本当に多文化共生を進めようと努力しているのか、非常に危ぶまれているのと。休止の間に、何人か議員たちで話し合うんですけど、一部の委員の中からは、県の職員なんでしょうけど、外国人もっと自立しろと、そういう言葉が出てきてしまう、そういう状況に今置かれているということは、非常に神奈川の多文化共生は今、危険な状況にあるんだなーと、今、小貫先生と話をしてたんですけど、やっぱり、こういう事は自治体に任せっきりにされてしまうからこうなってしまうのであって、やはり国の政策とか法が変わらない限り、私たちは住民として当たり前で暮らすということは出来ないと思う。

神奈川県知事で良い人の場合は保障されて、変わると保障されなくなる。ヘイトスピーチもなくなる。朝鮮学校への差別もなくなっていく。助成金は切ってしまう。拉致をするなら首だなんて、いろんなことを言われて、よく訳が分からないですが、そんなことを言われて、差別ということが公的に行われているが神奈川県内に行われているということに関しては、非常に危機感を感じているところです。

小 貫 : ありがとうございました。そういう、今までの歴史を踏まえて、でも、やっぱり神奈川、これから変わって行かなければならない。そういうことについて、みなさん、先ほどちょっと話し合ってもらったことを、もう少しテーブルごとに深めてもらいたいと思います。

今日は、そもそもこういう会に出てきて、今までお話を聞いて感じたことはどんなことがありますか、あるいは、自分が多分ここに出てきた人みたいに体験のある人、伝えたいこと、シェアしたいことがある人がいると思うんですね。そういうことをシェアしてみてください。

それをしたうえで、神奈川県、今この歴史の中でどんなところにあるのか、何が変わって良くなったのか、何が変わっていないのか、どんなことをして行かなければならないのか、テーブルごとに話し合ってもらいたいと思います。

テーブルには模造紙があるから、付箋紙をうまく使って、出た意見をバンバンメモを書いて、それを貼って行きながらやってもらおうと解り易いのかなと思います。

時間は30分間ぐらい、自分のエピソードなど紹介しながら、これからの神奈川について、意見を交換してください。こちらの話をしてくださった3人の方も、それぞれのグループに入ってくれるので、一緒に話し合ってみてください。

小 貫 : どうもありがとうございました。

まだいっぱい話したいことがあるかと思いますが、グループのトークをぜひシェアしてもらいたいと思います。周りを歩いて、やっぱり教育だよねという声が聞こえてきたり、その教育の内容をどうすんだろうという話、教育ってみんな同じ人間を育てんじゃないよ、自分が自分らしく生きられるってことじゃないのとか、いろいろな声が聞こえてきた気がするんですね。自分たちの中で出た話を、ぜひ伝えたいということをかいつまんでお話していただけたらと思います。ここから良いですか。

参加者 : 明治学院大学3年生の森房ユキです。あーすフェスタのフォーラムには3回目です。今回の私たちの班では、私今まで3回出たのですが、比較的理想的で、そもそもこのフォーラムに来てくれている方々は基本的に多文化共生の意見に賛成で、その考え方がベースにあると思うんですけど、私たちのチームは現実的で、多数の日本人が思っていることをちょっと現実的に見てみました。

日本人の多文化共生とかに関する考えって、本音トークで今言ったようなものがあるんじゃないかなと思いつて、さっき私の友達をせっついてでた考えがベースなんですけど、さっき斐さんがおっしゃっていた、労働力でしか外国人を呼ばないっていう本当に確かに、というのはニュースでは言わないじゃないですか。労働力がほしいから外国人を呼ぶなどとは言わないじゃないですか、言わないんですけどそれは事実として本当で、それはさっき話したんですけど、労働力がほしいというのは少子高齢化で、外国人もほしいし、日本人のほしいって思っているんで、外国人に対してだけじゃないかなっていうのも一つありました。

本音として外国人の方々に、日本人のこと、日本のことだけで精一杯で、身の回りだけで精一杯という人が多くて、で、例えば制度も、まだ外国人に対する制度も整っていないよねという話もあったんですけど。

例えば、給食で文献を見てくださった方がいたんですけど、ムスリムの方で給食がハラールに対応していないから、ハラールのもので対応してほしいという意見があったとしても、ハラールフードで宗教だけの問題じゃなくて、アレルギーとかあったら、毎回その人のために少量を提供するのかという難しかったり、外国人だけの問題ではなく、日本も精一杯になっている点があるのかなという意見もありました。

こういった状況を今、外国人に対する目線が向いていないという状況をどう改善していったらよいのかなという点を考えました。

一番大事なのが、現状を知らないということで、私とか彼女は明治学院大学の国際学部に入っている人たちは勉強したりしてきているので関心があると思うんですけど、普通の義務教育で一般に中学校まで普通にやってきたら、多文化共生についてとかを勉強することはなくて、今は労働力ってのがあって、英語の教育とかは凄く充実し始めているんじゃないかと思いますが、多文化共生のための様々な問題とかの現状を考える教育がいいんじゃないかなと思うんで、それを大人になってからやると固い考えじゃないか、既に価値観が備わっている状態からするのは難しいんじゃないかなと思うので、義務教育の状態、もう少し考え方が、さっきアイシャさんがおっしゃっていたんですけど、幼稚園の頃はあんまりそういうことは感じなかったって言うんですけど、そういう頃から、そういった教育をしていったら、日本に住む外国人に対して、外国籍の人、外国にルーツを持つ人とかにちょっと興味を持って、もっと考えていける人がマジョリティーになっていくんじゃないかと思いました。

小 貫 : ありがとうございます。労働としてね、労働が理由で人が移動している、だけどそこで移動している人は、人間であり、生活する人であるというテーマで他にもでたところがありますか。社会を変えていくためには、やっぱり日本の学校が変わらなければいけない、そこで共生に関する教育がなければいけない、そういう話がでたところはあるですか。

参加者 : 小貫先生にお世話になっている東海大学観光学部3年生の渡辺と申します。
今教育の話が出たんですけど、私の母が小学校の小学校教諭をしていて聞いたんですけど、どうしても日本の教育はみんなを一緒に育てようとするのが多くて、それから日本って凄いなよとか教わると言うんですけど、私は、日本が凄ってことはいろんな国に行つてわかったことで、日本が凄ってことは実は普通のこと、他の国行つても、私はブラジルとサウジアラビアとタイ、台湾、中国、韓国、あとはアメリカとか行つたんですけど、どこの国に行つてもやはり優しくされるし、普通に荷物が重そうだと持ってもらったりとか、道に迷っていたら教えてもらったりとか、どこの国に行つても優しいし、おもてなしはあると思うのに。異常に日本って、日本はおもてなしの心があつてとか、そういうことを教わっていたので、凄く自分の国に誇りを持っていたんですけど、だんだん大きくなってきて、私凄く K-POP が好きなんですけど、それでニュースを見ると日韓問題があつて、日本は凄く良い国という割に歴史的に良くなかったり、何か言っていることとしてきたことが違うなど、私は今凄くショックを受けて、今まで大きくなってきました。

そこで、やはり問題なのが教育なのかなと思って、教育の中身を個性が生きるような仕組みにしないと、みんな一緒とか、団体意識に個人が負けてしまうというのが、私は心配です。

私の班としては、国という概念の前に、何々人というのではなく、地球人としてみんなが意識を持てれば良いなど、そんな中でもやっぱり国と住んでる場所と環境が違うので、文化とか、その国ごとで尊敬しつつ、でも人としてはみんな同じで良いんじゃないかと、そういう考えが広がれば良いかなと考えています。

小 貫 : どうもありがとうございました。教育の中で、ひとり一人が自分の人生を見つけることが出来るような教育が大切だね。

去年のフォーラムの時に実は性のアイデンティティーについて、自分自身が思いのある人が司会をやって、外国籍ってことだけじゃなくて、いろんな意味で自分というものを追及できる社会じゃなきゃいけないし、そういうところはやっぱり難しいところがあるという話をしたんですよね。そういった例も、自分というものの大切さとか、個性とか、そういったことが出たテーブルとかありますか。続きで、教育が変わらなければいけないという話が出たテーブルはありますか。

参加者 : 小貫先生に学科などでお世話になっている東海大学2年の湯沢です。

私たちの班は、外国籍二人、日本人二人の班だったので、外国人からすると平等の公正は実は平等ではなかったという話が出る中で、日本人からすると、日本人として生きている感じない壁っていうものがあつたんじゃないかなって話が出て、理解する側と理解してほしい側のタイミングとアプローチの仕方が、凄い大事なんじゃないかなって話が出て、エピソードとしていじめじゃないけど異質感があつたり、何かちょっと避けられている壁が有るっていうのを感じてたり。逆に日本人側は、外国人の留学生とかと接して行く中で、外国人と接している人は良いけど、周りで接していない人は、何であの子は外国人と居るのとか、留学生と何で話しているのみたいな悪い噂が立ったりするのがあって、それを感じてたりするので、お互いを理解し合わないといけないし、一人でも理解者が居ると、周りも必然的に変わってくる、周りの態度も変わってくるということがわかりました。

どのような変化が必要かというところで、あーすフェスタなど、このように外国人の人と接せられる機会がある行事に、小学生など小さいうちの遠足などで訪れて、小さい頃から外国人を近くに感じたり、先生が学ぶことが出来る、理解する場を作ることが必要なんじゃないかなと私たちは思いました。

小 貫 : 素晴らしい。どうもありがとうございました。あーすフェスタに実は苦情があつてですね、何でこんな県の端っこでやるのって、真ん中でやろうよ、海老名でやったら如何ですかね。来年は海老名でやらないですかって思って、毎年言うんですけど、ジュニア版でもなんでもいいからね、ほんと広げたんですよね、こういうことをね、隅っこでやっているだ

けじゃなくてね。彼女の話に繋がって、つながらなくても良いから、うちの話をしてほしいという方、手を挙げてください。

参加者 : 明治学院大学社会福祉1年生の日野と申します。

うちのグループは、外国人と日本人と結構かかわりにくいと思う方が多いと思います。以前、中国人は中国人のグループの中でずっと話して、日本人は日本人のグループで話しているのを見たことがあります。

これは両方がもっと努力しなければいけない状態だと思っています。外国人はもっと積極的に声をかけて、日本人と積極的に会話をする姿勢を取るべきだと思います。そして、日本の側でも外国人を外国人ですかと扱うのではなくて、日本人と同じ扱い方で、外国人と接するのが大事だと思います。

日本のいろいろなビザに部類されたんですよ。労働ビザとか、留学ビザとか、技能実習生とか労働ビザとか今年初めに、新しいのが始まったんですよ。それは、日本の都合で外国人を労働力として扱って受け入れようとするものです。それに対して、日本側も外国人をただ労働力として扱うのではなくて、平等な人間として受け入れるべきだと思います。そういう風にならなうと思っています。

小 貫 : ありがとうございます。留学生、あるいは外国人、日本人がもっと接点を持たなければならぬという話が出て、ちょっと一周回ってきて労働者というだけじゃなくて、生きている人間、生活者として考えて行かなければいけないことが出たんだと思います。

参加者 : 明治大学現象数理学科で数学を専攻しているんですけど、今日は数学とは関係ないんですけど、今から非常にまとまった話をしますんで、しっかりと聞いてください。

今、労働者を人間として扱ってもらえるかという話をしたんですけど、実際に外国の方というのを身近に感じられなくて、一人の人として見えていないことが非常に多いですがね、実際あってみたら普通の人間だったという当然なんですけど、凄く多いという話を重点に置いて私は話しました。今から、まとめます。

まず、いろいろな話をしてみたんですけど、とりあえず制度が変わらないと、教育とか制度が変わらないといけないよという話をしました。そのためには、どうした良いのかという話なんです。そのためには世論を、多数派を変えなければならないという訳なんです。行政というのは、自分たちの地位を失わないために、世論に媚を売るわけですから、だから世論というのは非常に重要になっているわけですよ。じゃ、世論というものを考えるにはどうしたらよいか、それはマジョリティー化、問題意識を持たなければいけない。僕は在日コリアンなんですけど、僕が問題意識を持つのはあまりにも当然のことなんです。なぜかという、自分の生活にあまりにも密着があって、何かしないとやばいと。でも、なぜ多数派の方が問題意識を持たないかという、自分たちは全く関係ない、ほっといても何か変わるわけではないし、何もしなくても良いんですよ。だから、問題意

識を非常に持ちづらいんですよ。だから、どうすることで問題意識を持ち始めるかということ考えてみました。

それは、そのためには実際に外国人の人に会ってみるというのが非常に重要だと思います。なぜかという、よくある話なんですけど、おれは朝鮮人・韓国人は嫌いだけどお前は好きだよとか、おれは中国人が苦手だけどお前は好きだよとか、つまりそれは偏見があって実際に会ってみたら本当に何も変わらない人なんだな一つてことが一杯あるんですね。でも、実際に外国人にかかわる機会って少ないと思うんですよ、じゃ、どうやって関われば良いのかなって言う話なんですけども、それは僕の母の友人がセブンイレブンの店長をされていて、セブンイレブンって外国人が多く働いているんですけど、その店長の方が、同じ国籍の人は同じシフトに入れないようにしていたみたいですね。そうすることで、いっぱい接する機会が出来てから、考え方が生まれるんじゃないのかというような。こういう小さな気遣いというものが重要な訳ですよ。つまり、行政が変わるのは難しいんですけど、こういう企業が、今のようなことは店長が勝手にやっていたことの様なんですけど、それがセブンイレブンとかがそういうシフトで同じ国籍の人は一緒に入れないというような制度にすると接する機会が増えるわけですね。そうやって接してみると、全く問題意識を持っていなくて、どうでも良いと思っていたことが、実際に会ってみて、この人何か大変そうだから、この人のために何かできることはないかなと、出来ることはないかなと、実際に接してみると気遣いが生まれるのかなと思います。

つまり、とりあえず接してみるというのが非常に重要で、そのためにはキーワードは変わるで、最終的には世論が変わって、行政が変わるって言う話でした。以上です。

小 貫 : 凄い、数学的に良くまとまった発表だと思うんですけど、もう一か所ぐらいどこか。

参加者 : 金と申します。私も在日朝鮮人三世です。

こちらでは、この数年間を振り返って、在日外国人を取り巻く状況はほとんど変わっていないんじゃないかと、例えば昔に比べたら差別が減ったよねとか、そういう風潮はよく見受けられるんですけど、国籍、あと男女間の差別というのも未だに根強く存在する、それは今も昔も変わってないんじゃないかという話が出ています。

私、そして企画委員長も含めて在日朝鮮人、所謂オールドカマーですけど、特に植民地時代から、例えば欧米系の外国人に対してはハーフかっこいいねとかもてはやされたりもするんですけど、その一方でアジア系の朝鮮、中国という人たちは、ヘイトスピーチが川崎でもありますし、日本から出て行けということもあります。私自身も一人暮らしをしているんですけど、住居差別が、私も実際受けたことがあります。そういう面でもはたして神奈川県が多文化共生で先進的なのか、外国人を受け入れやすい社会なのか、そういったところが疑わしいのではないかと思います。

そう言った根本的な問題としては、行政であったり、国の仕組み、制度、法律で、私たち当事者が主張しづらい、そう言った風潮が残っているんじゃないかな、そう言った意見が出ました。

どうして変えて行くかというところは、これまで、私たちも権威を持って戦ってきたわけですけど、やはり日本の大多数の人たちが在日外国人の問題に無関心、興味がない、自分とは別の問題だ、そう言った考えが結構多いと思うんですね。

そう言ったところを変えて行くために、私たち当事者が声を上げて、情報を発信して行って、認知度が低いので、それを変えて行く、なかなか一筋縄では行かないと思うんですが、やはり当事者たちの声をくみ上げて、日本の方たちと手を取り合って行ければ。また、在日外国人も今後、来年の東京オリンピックを控えてどんどん増えて行く、そう言った中で、私たちも同じ外国人同士、どう受け入れて行くか、どうお互い手を取り合って行くか、そう言ったことも課題として残って行く、そんな話ができました。以上です。

小 貫 : どうもありがとうございます。去年もそうだし、今回もそうですが、そもそも主催者がそうなんだけれども、やっぱり在日の人たちの力、この会あーすフェスタのあーすフォーラムを作ってきて、支えてきて、今日も凄くたくさん参加してくれていると思うんですよ。それが、じゃ、在日の人たちが権利を獲得してきたか、本当に社会を変えてきたのか、まだまだいっぱい問題が残っているよ、積み残していることがいっぱいあるよということが何回も出てきたと思うんです。

それからもう一つは、その運動というのが、本当に後から来た人たちの方向に向かっているのかなって、後から来た人たちは在日の人たちが勝ち取ったことの上に乗っかってさらに新しく進歩して行くっていう風な道筋ができてきているのかなっての疑問が、何回も述べられたんだと思うんですよ。

だから、やっぱり、まだまだだし、もっと広げて行かなければいけないし、でもすごく良かったのは、良かったというか面白かったのは、自分の学生も来てくれたけど、他のいろいろな学生も来てくれて、僕が来いって来てくれたわけじゃなくて、知らない間にきてくれてただけど、いろんな大学生が凄く関心を持っている人が居るし、増えているし、つながろうとしているというのが凄く感じられたと思うんです。だから、今日のテーマでもある古い運動と新しい社会状況が手を結んでいく、その中にやっぱり若い人たちの力って言うのが一緒に入って行くっていう作り方が大切なんじゃないかなって凄く思いました。そして、そのためにもやっぱり、もっと若い世代、小学生とか中学生の世代への働きかけも必要かなと思います。

僕のメッセージはこのくらいにしておいて、やっぱり神奈川県という先進的と思われている地域がじり貧であり、やはり県央とかね、県の中でももう少し後発の地域では、歴史を踏まえていないことが一杯起きているので、ぜひ県全体に広がって行くようなあーすフェスタになってもらいたいなって、実に今日は、毎回思っていました、今日も凄くつくづく思いました。海老名市で!!!

今日お話して下さった斐安さん、堤さん、アイシャに、最後までいて最後に一言ぐらい言い忘れたことがないか、皆さんの話を聞いて思ったことはないか。

斐 安 : みなさんありがとうございます。

みんなで一緒にやって行きたいと思います。あの、誰かの問題ではなくて、他人事ではなく、自分事として。外国人の問題は、外国人の問題ではなくって、日本の、この国のこの地域、そして日本人自身の問題だと、外国人が住み易くなったときは、間違いなく日本人はもっと住みやすくなっていると思います。

私たちは生活困窮者自立というのをやっています。日本人の支援もしてるんですね。そうすると、本当に、ここを出たんですけどヘイトスピーチに出ている大方の人たちというのは、生活困窮者なんです。非常に限られたものの見方の中で、非常に生活が困窮している人たちだから、そんな世界に入っていくことによって、日本人としてのプライド、さっきの日本人凄いて言うその世界に流れ込んで、ああ言う魂を殺戮するようなことが起きているわけですね。

みんなで、みんなで心が豊かになった時に、間違いなく日本良くなっていると思うし、世界がもっとアジアがもっと平和になるし、世界もっと良くなっていると思います。みんなで、やりましょう。以上です。

堤 : そうですね。みんなでやって行くって言うのはもの凄く良くて。

20年前と今で何が違うかという、皆さんお持ちの携帯電話、要はインターネット、情報のスピードが格段に違うと思うんですよ。なので、今日皆さん耳に入れていただいた、頭に入れていただいた情報を少しでも多くの人に広めていただけたら、また世の中ほんの少しだけでも、いきなりは変わらないですよ、そこは難しいので、少しだけ変えられるのなら、少しでも動いて、今日できることから初めて頂けたら、皆さんもっと良くなって行けるのではと思います。そう思います。よろしくお願いします。
ご清聴ありがとうございました。

アイシャ : みんな、自尊心を捨てて、一緒に頑張りましょう。
(拍手)

小 貫 : どうもありがとうございました。時間がきちゃったんですけど、メの言葉を大会委員長、勇俊。

司会者 : 今日は長い時間、お付き合い頂いて本当にありがとうございました。

私もこのあーすフェスタに10年近く係ってきていて、やっぱりこの20年間、20回目という歴史を考えて行くうえで、やっぱりこれまで支えてくださった先人たちの意思というものを私たちは引き継いでいかなければいけないと思うんですよ。さっき堤さんともおっしゃっていたんですけど、本当に時代が変わって情報社会になって行きながら、グローバルな世界になって行く、それって全然若者の感覚が変わってきていると思うんで、そういった時代の波について行かなければならないのもそうですし、どういう時代の波に乗っ

て、何を継承して行かなければいけないのか、そう言ったことをしっかり考えて、出来ることを実践して行くことが重要なのかなって、今日もまた参加して思いました。

一人一人の出来ることというのは、大きなものではないかも知れませんが、積み重ね、継続、これしかないと思いますので、今日をきっかけに素晴らしいお話合いが出来たと思うので、今日これから、今から出来ることを皆さんでやっていって一つずつ変えて行ければと思います。

今日は本当にありがとうございました。

それは、以上を持ちましてあーすフェスタフォーラム、多文化共生のこれまでと、未来へのとびらを終えたいと思います。

ありがとうございました。

(拍手)